

# 水戸学の成り立ちと幕末に与えた影響

水戸市立内原中学校 1年  
金谷 ふうわ

## 研究の動機

私が今回、水戸学について研究しようと思った理由は、以前に水戸について調べる機会があり、その際に水戸藩について研究したことが始まりだ。水戸藩9代藩主徳川斉昭は弘道館を造り、学問を人々に教える機会を与え、水戸藩は江戸時代、幕末に水戸学を通して重要な役割を担ったとあった。そのことを知り、私は水戸学に興味を持ち、水戸学の成り立ちや関連する人物、当時の日本における藩内外への影響などを知りたいと思った。

## 研究の方法、進め方

以下の方法で研究を進めた。

- ① 水戸学、水戸藩、及び水戸徳川家に関する研究結果や関連資料が展示されている博物館、資料館を訪問し、水戸学に関する基本的な知識を得る
- ② 水戸学、水戸藩、及び水戸徳川家に関する史跡を訪問し、幕末・明治維新期の偉人たちの見た景色や建物を体験し、偉人たち生活や考えていたことに思いを巡らすことで、博物館や資料館で学んだ知識を補完する
- ③ 水戸学について書かれた書籍、具体的には「水戸学と明治維新」(吉田俊純、2003年)、「水戸学事始」(松崎哲之、2023年)を読み、水戸学に関するより深い理解を得る
- ④ それぞれの博物館や資料館、史跡を訪れて学んだ知識や感じたこと、書籍から得た専門的な考えを踏まえて、自分なりに「水戸学」を総合的に理解し、自分なりの考察を行う

## 研究内容

(※文中の肖像画は自筆)

### ■ 水戸学とは

水戸学とは、水戸藩で生まれた学問であり、大きく前期と後期に分けられる。

前期は水戸藩第2代藩主徳川光圀が、正保2年(1645)年から始めた「大日本史」編纂事業が中心になっており、「大日本史」編纂の過程で生まれた儒学(朱子学)を基本とした思想が水



**徳川光圀** 1628-1700  
 水戸藩初代藩主徳川頼房の三男として誕生した。青年期の光圀は自由奔放な行動をとっていたが、18歳の時に歴史書「史記」の「伯夷伝」を読んで感銘を受け、以後真摯な姿勢で学問に励んだとされる。



**徳川齊昭** 1800-1870  
 徳川治紀の三男。1829年に水戸藩第9代藩主となる。藩政の行き詰まりと対外的危機感が高まる中で、齊昭は藩主となり、藩政改革に着手。精力的に藩政改革を行い、一般に水戸の天保の改革と呼ばれる。



**会沢正志斎** 1782-1863  
 10歳で藤田幽谷の弟子となり、若くして対外関係に強い関心を示した。1807年から17年間、齊昭の学問教師を勤め、齊昭が藩主に就いた後は、彰考館総裁・弘道館教授頭取などとなり、多くの門人を育てた。



**藤田東湖** 1806-1855  
 父は藤田幽谷。22歳で家督を継ぐとただちに齊昭の藩主就任に尽力する。齊昭の絶大な信頼をうけ、藩政改革の全般にわたって力を尽くす。全国の有志の信望を集めるが、安政の大地震で圧死する。

戸学前期の基盤となる。特徴として、当時は半ば強制的に仏教徒にさせられていた時代の中、古来の神道と、大陸から伝来し日本でも倫理や政治の面で活用されてきた儒教の根が同じである、とした「神儒一致」がある。

後期は水戸藩第9代藩主徳川齊昭を中心とした学者らによって形成され、後期の基盤となる「尊王攘夷思想」は幕末から明治維新时期から近代日本に至るまで、後に大きな影響を与えた。この思想、元は水戸藩儒学者、藤田幽谷が著書「正名論」にて、尊王の重要性を説いたことが始まりとされ、幽谷の考えを受け継いだ会沢正志斎・藤田東湖たちが、幽谷が唱えた「尊王」と外国に脅かされている国家を守るために「攘夷」が必要であると主張した。幽谷の弟子である会沢正志斎の「新論」は、後期水戸学の代表的著作として全国の志士たちに大きな影響を与えた。そして、齊昭は藩校としての弘道館を設立。総裁の会沢正志斎を教授頭取とした。この弘道館の教育理念を示したのが「弘道館記」であり、署名は齊昭になっているが、実際の起草者は幽谷の子であり、弟子でもある東湖で、「弘道館記」に「尊王攘夷」という語が初めて使われ、これが幕末の動乱期に掲げられた標語となっていく。

水戸学が論じられる場合、その特異性から後期水戸学に限定して論じられる場合が多い。

## ■ 「後期水戸学」が幕末に与えた影響

### i) 水戸学の広がり

齊昭の水戸藩主時代、水戸学は弘道館だけでなく、その他の水戸藩内外の郷校においても教育が施された。この学問が藩内外の幕末の志士たちに強い影響を与え、弘道館は水戸学の中心地として機能する。つまり、水戸学は幽谷やその弟子たちの力によって全国的なものになり、齊昭によって発展したと言える。

しかし、水戸藩内外に影響を与えていた齊昭の藩政改革は、幕府の支配体制の不安定化をもたらすとして幕府から問題視され、突如、齊昭に藩主辞任と謹慎の罪、齊昭の側近である改革派の家臣たちも同様に謹慎を言い渡され、挫折する。この謹慎生活中に東湖が執筆したのが

「弘道館記」の上下2巻からなる解説書、「弘道館記述義」であり、水戸藩の尊王攘夷論の代表的著作として、弘道館の教育方針にと留まらず藩政や幕末、明治期の思想に大きな影響を与えた。

## ii) 水戸学が幕末の有力者に与えた影響

東湖の「弘道館記述義」、正志斎の「新論」はともに幕末の志士たちに強い影響を与えた。そのため、水戸には全国から多くの志士たちがその学問を学びに来ており、その中には長州藩の吉田松陰も居た。松陰は正志斎を師とし、「松下村塾」では水戸学を教えていたとされる。松下村塾では久坂玄瑞、吉田稔麿、高杉晋作や、初代総理大臣の伊藤博文、第3、9代総理大臣山県有朋も学んでいる。彼らは、吉田松陰を通して、水戸の尊王攘夷思想の影響を受けて、幕末の倒幕運動の中心として活躍し、最終的に明治政府を樹立し、天皇を頂点とする国家を築いた。そして、斉昭の7男であり徳川幕府15代将軍である徳川慶喜もまた、幼少期を水戸で過ごしており、弘道館で会沢正志斎から教育を受けていた。

こう見ると、幕末に敵対していたいづれもが、お互いに水戸学に由来する尊王攘夷思想の影響を受けていたことになる。

中でも、長州藩の尊王攘夷はかなり水戸学の影響が強く、当初、開国反対としての攘夷について長州藩も当初は激烈に支持をしており、1863年(文久3年)、下関を通過するアメリカ、フランス、オランダの船に対し砲撃をし、攘夷を実行に移すほどだった。しかし、翌年その報復として上記3国にイギリスを加えた4国の艦隊に下関を砲撃され、長州藩は外国、特に西洋列強の強さを実感し、攘夷が不可能であることを悟る。それは薩摩藩も同様だった。

また、実は「新論」で攘夷思想を広めた正志斎も、晩年に「時務策」を執筆し、開国を唱えている。「新論」を執筆してから37年たち、正志斎もまた、変化を読み取り、開国反対としての攘夷は現実的に不可能であることを悟り、開国して国力を強めるべきだと主張する。「時務策」は慶喜に対して執筆されたとの説と、水戸藩内の尊王攘夷激派に対して書かれたとの説があり、定説はない。そして慶喜も最終的には開国に向けて動いており、慶喜も政治的に攘夷が不可能であることが分かっていた。

## iii) 水戸学と開国

話を1853年(嘉永6年)に戻すと、ペリー来航により幕府は国防についての造詣が深かった斉昭を海防参与として幕政に参加させることを決める。これによって、斉昭は完全に復権し、これに伴い改革派の処分も解除され、水戸藩政にも参画することになった。また、この時、幕府はアメリカの開国の要求に対して判断をしかねて、諸大名に開国の是非を問うということをした。このため、諸大名や藩士たちはこぞって日本の行く末に対して議論を交わすのだが、この時に斉昭や東湖は尊王攘夷の論客として活躍し、諸大名や家臣たちと深く交流する。特に東湖は西郷隆盛など幕末に活躍した有力者と議論を交わし、水戸学の精神、尊王攘夷の精神を伝えていった。そして、1854年(嘉永7年)に日米和親条約が結ばれ、1639年(寛永16年)から始まっ

た鎖国状態が終わり、日本は開国した。

多く場合、「外国の武力を恐れ、開国を決めた幕府」や「開国をさせた外国」に、諸大名や志士たちは不満を募らせ、そこで盛り上がったのが攘夷思想であり、幕府の権威は失墜し始める。当然斉昭は、開国には反対だったため、幕府の首脳部と対立するが、それでも幕府は斉昭の力を頼り、幕政に関与させ続ける。この混乱した状況こそ斉昭の、水戸学の力の見せ所のはずだったのだが、1855年(安政2年)巨大地震が江戸を襲う「安政の大地震」で、藤田東湖、戸田忠太夫という改革派の有力者が死亡し、斉昭は強力な後ろ盾を失ってしまう。

また、時の徳川幕府13代将軍家定は病弱な上、後継者を残す可能性が低く、後任の14代将軍を誰にするかで、一橋慶喜を推す「一橋派」、徳川慶福を推す「南紀派」の間でも対立が生じていた。この両派はアメリカとの通商条約の締結に向けた交渉の中でも、それぞれに開国派と拒絶派を内包し、幕政は次期将軍問題と開国問題でさらなる混乱に陥ることになる。

この時の日米交渉の責任者であった堀田正睦は、アメリカの要求に応じ、さらなる開港と貿易を認めることを決意するが、反対派を抑え込むことが出来ず、彼は朝廷に勅許を求めた。これまでは幕府の判断が絶対として、鎖国も日米和親条約も事後報告で済ませ、天皇に判断を仰ぐことはなかったにも関わらず、なぜそんなことをしたのか？それは、水戸学や国学の普及によって、日本の理念的な統治者は天皇であることが多くの人に意識されており、そのお墨付きを得ようとしたに他ならない。特に反対派の頭目である斉昭は尊王思想の旗頭であり、勅許が下りたとなれば認めざるを得ない。それは、他の大名も同様だ。この時、尊王思想は深く日本人の意識に広まっており、それこそ水戸学、国学の影響と言えるだろう。

#### iv) 水戸学を離れ、分裂する尊王攘夷

しかし、勅許を求められた時の天皇、孝明天皇は条約に対する勅許を認めなかった。

幕府はこの状況を打開するため、1858年(安政5年)4月に臨時の最高職である大老に井伊直弼を就任させるが、すると事態が急展開する。同年6月、押し切られる形で直弼は勅許のないまま日米修好通商条約の調印を認め、さらに同月、次期将軍を慶福(南紀派)に決定し、直弼は諸問題を一気に解決した。当然、この行動に一橋派は激しく直弼を批判する。そして、朝廷からの勅書をめぐり、正志斎を頭目する「尊王攘夷鎮派」と「尊王攘夷激派」に、かつては同じであったものが分かれてしまうという新たな事態が生じたのだった。

この尊王攘夷激派の特に過激な集団が引き起こしたのが、「桜田門外の変」だ。

1860年(安政7年)3月3日、彼らは白昼堂々、大老井伊直弼を暗殺した。この事件の5ヶ月後、徳川斉昭は水戸城中で急逝するが、尊王攘夷激派の動きは止まらず、1862年(文久2年)には、老中の安藤信正を襲撃(坂下門外の変)し、背中を負傷した信正は「背中に傷を受けるといのは、武士の風上にも置けぬ」と批判され、老中の職を罷免されてしまった。これらの事件がきっかけで、幕府の権威は失墜し、世の中は倒幕運動へとつながっていくが、そこで掲げられたのが「尊王攘夷」という水戸藩が発明した言葉だった。

それは本来、徳川将軍を覇者に見立てて、将軍が旗頭となり、諸大名を率いて天皇を尊び、

外国を追い払うことを期待するものだったが、その将軍が外国の軍事力にひれ伏し、天皇の許しを得ずに条約を結び、外国との貿易を許可してしまう…。一連の行為によって、将軍はすでに覇者の役目を果たしていないと考えられ、このため、「尊王攘夷」は当初の理念からますます変容し、新たな覇者を求めての討幕運動の標語となっていくことになる。

#### v) 水戸学を源流とする大政奉還



徳川慶喜 1806-1855  
徳川斉昭の七男として誕生。翌年には斉昭の教育方針により水戸城に移り、幼少期に弘道館で学ぶ。1866年に将軍となるが、翌年に大政奉還。同年4月江戸城開場の明け方、水戸に移り、謹慎生活を送る。

その間、藤田東湖の息子、藤田小四郎が中心となり、水戸藩内外の尊王攘夷派で構成される天狗党が起こした争乱「天狗党の乱」などによって、水戸藩は尊王攘夷の有力な志士たちの多くを失う。

1866年(慶応2年)、慶喜は第15代将軍に就任し、翌年に大政奉還を実行。ここに幕府は多目的には滅びたが、慶喜とすると、幕府はまだ圧倒

的な軍事力を持っていることと、長らく政治に携わっていなかった朝廷が政務を取り仕切ることとは不可能と考えており、自らがリーダーとなって新政府に参画しようとしていたとされる。

この慶喜の考えは、薩摩藩・長州藩・土佐藩が中心となって天皇を戴く形で新政府軍を組織し、錦の御旗を掲げて旧幕府軍に戦いを臨んできたことで崩壊した。この鳥羽伏見の戦いに端を発する新政府軍と旧幕府軍との一連の戦いを「戊辰戦争」と言うが、この鳥羽伏見の戦いで、敵軍に錦の旗を見た慶喜が、戦意を喪失してしまったのは想像に難くない。深く尊王攘夷の影響を受けていた慶喜は、圧倒的な軍事力を持ちながらも天皇に弓を引くことが出来なかった。そして、慶喜はひそかに大阪から江戸に戻り、朝廷に対して絶対恭順の姿勢を示す。総大将を失った旧幕府軍は総崩れとなり、新政府軍の西郷隆盛と旧幕府軍を代表した勝海舟の交渉によって江戸城が無血開城され、新政府軍と旧幕府軍との戦いはここに決着する。

水戸学の教えを受けていたからこそ、慶喜は天皇に政権をお返しできたのであるし、また、薩長のあやつり人形と知りながらも、天皇の軍と戦うことが出来なかったのだろう。慶喜の根底には「大日本史」に描かれた理念があったのではないだろうか。

その後、水戸藩内では門閥派と改革派の戦争(弘道館戦争)を経て、両派の対立は終焉するものの、一連の内紛で水戸藩の人材は枯渇し、新政府に人材を供給することはできなかった。

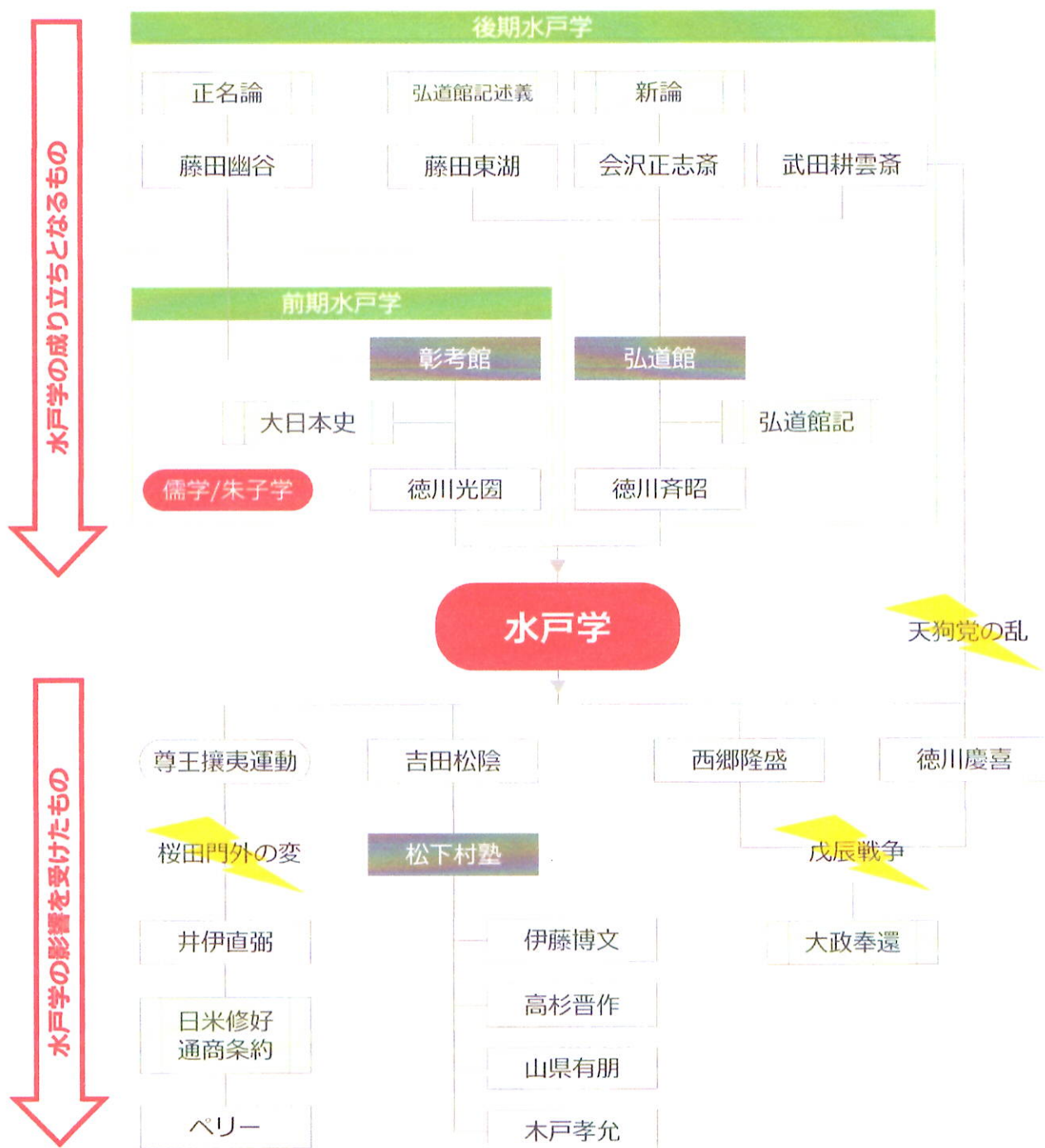
#### vi) 水戸学と近代日本の発展

徳川光圀が起こした「大日本史」編纂事業で醸成された水戸の学門の精神は、将軍を旗頭とはしなかったが、明治政府によって、天皇を頂点とする中央集権国家が構築されることで実現されたといえる。また、理念的な統治者を天皇とする思想が日本人に浸透し、日本は西洋文化を受容して近代化を実現させつつも、外国からの干渉を受けず、独立を保つことができた。

幕末から明治にかけて、時代を動かした原動力は水戸学であったといえるだろう。

## 水戸学 関連図

徳川光圀の「大日本史」編纂から始まる水戸学が、幕末から明治維新に至るまで、どのような歴史の登場人物や出来事に影響を与えていたのか。また、幕末においては幕府側と朝廷側、敵対する双方が水戸学に由来する尊王攘夷思想の影響を受けていたことが分かるよう、関連図を作成した。



## 水戸学に関連する史跡マップ(水戸市内)

水戸学をより理解するために、水戸学に関連する人物が残した書物や文化財、史跡や建造物を見学した。特に偕楽園はこれまでに数えきれないくらい訪れていたのだが、改めて好文亭を訪れてみて、当時の斉昭は自身が設計したこの場所で様々な人をもてなしていたのかと思うと、斉昭の根底ある「君臣に義あり」の思想や藩民への感謝などを感じる事が出来た。



### A: 弘道館



1841年に徳川斉昭によって創設された藩校であり、当時で日本最大規模の敷地面積を有し、総合大学のような偉容を示していたとされている。

斉昭は苦しい藩財政の中でも意志を貫き、総合的教育機関の構想を実現。独自の発想で建物を配置し、「文武一致」「神儒一致」「弘道館記」の重要性を表現した。

### B: 偕楽園(好文亭/吐玉泉)



現代では日本三大庭園に数えられる水戸・偕楽園も、徳川斉昭が領民の休養の場として造園した。孟子に記された「衆と偕(とも)に楽しむ場」が園名の由来とされる。園内には斉昭の設計とされる建物「好文亭」や、水利に詳しい斉昭が高低差(逆サイフォンの原理)を利用して考案し、湧水が眼病に効くとされた「吐玉泉」がある。

### C:武田耕雲齋の墓



武田耕雲齋は斉昭時代から藩の要職に就く。天狗党の筑波山挙兵の際は、藩から鎮静化の命を受け派遣されたが、天狗党首領格であった藤田東湖の息子・小四郎に同情し、首領に擁立され、共に京に上り志を訴えようとした。これはくしくも、東湖を師と仰いだ西郷隆盛が西南戦争時に置かれることになる状況と似ている、と感じる。

### D:常盤共有墓地



徳川光圀が家臣の墳墓として造成した。水戸学の教えに「神儒一致」があるが、これは仏教とは距離を置く思想であり、この墓地も特定の寺院に属さず様々な宗派の共有墓地として現在に至る。墓地には藤田幽谷・東湖親子、安積澹泊(TVドラマ「水戸黄門」の格さんのモデル)や、桜田門外の変を決行した水戸藩士たちの墓がある。

### E:会沢正志齋の墓



水戸藩士の子として生まれた正志齋は、10歳にして藤田幽谷の私塾で学び始め、17年間斉昭の学問教師を務めた後、彰考館総裁や弘道館の初代教授頭取などを歴任した。藩内外に多くの門人を育て、正志齋が43歳の時に著し、尊王攘夷論を体系的にまとめた「新論」は当時の多くの志士たちに読まれたベストセラーだったようだ。

### F:笠原水道



1663年、水戸城下町の飲料用水確保のために徳川光圀が命じて作らせた、日本で18番目に古いとされる上水道。岩と銅で作られた地下用水路で長さは約10km。1802年(斉昭時代)に大規模な改修工事が行われ、「浴徳泉の碑」が建てられている。現在、竜頭共用栓が復元されているが、出てくる水は塩素が注入された湧水だそう。



a:茨城県立歴史館



茨城県の歴史に関する資料が保存され、敷地内には江戸時代の農家建築や明治時代の洋風校舎も残されているが、江戸時代の水戸藩に関する資料も多く展示されている。会沢正志斎の著書「新論」を見ることが出来た。同じものを当時の志士たちが読み、この本が時代を動かした原動力そのものかと思うと不思議な気持ちになる。

b:徳川ミュージアム(高枕亭跡)



水戸徳川家2代目藩主である徳川光圀が建てた茶室「高枕亭」跡地に立ち、水戸徳川家に伝わる資料を見る事が出来る。伊達政宗から水戸徳川家に贈られ、代々の当主に受け継がれる刀剣「燭台切光忠」の展示があった。この「燭台切光忠」については、関東大震災で焼失したとされていたが、近年、現存が確認されたとのこと。

## 研究のまとめ

今回、過去に水戸藩について調べる中で知った、「水戸学」について、詳しく調べてみたが、そこには私の想像を超えた学問としての歴史があった。水戸学は、特に、江戸時代末期から明治維新期にかけて、日本全国の偉人や当時の日本全体に大きな影響を与えていて、その影響は日本の近代国家としての礎になり、現代に生きる私自身の基本的な思想にも繋がっている、発見があった。水戸学には、私が事前に想像していたものを大きく超えたスケールがあって驚いた。

私はこの研究を通して、水戸学が生まれた水戸市について誇りを感じた。他の地域では今では跡碑のみが残っているだけのところも多い中、水戸市には弘道館などの学問に関する歴史的な史跡や資料が現存している。だからこそ、これらの場所に実際に触れることで、歴史を身近に感じ、当時の水戸学者たちの志や努力を実感することが出来るのだと思った。弘道館が閉校してから150年以上の年月が経っている中、光圀から始まり250年かけて「大日本史」を完成させた水戸藩士の「生涯学習」という精神が、現代の水戸にも受け継がれ、学ぶ心が残っていることに素晴らしさを感じた。

以前、私の母方のルーツは江戸時代から水戸の城下町に住む家系であると聞いていたが、今回の研究を通じて、水戸学を共通項とした現代に生きる自分と江戸時代を生きたご先祖様との繋がりを感ずることが出来た。

今回の研究で、特に攘夷の考え方の違いから江戸時代末期の水戸学には学閥があることが分かったが、私は尊王攘夷鎮派がとった「西洋の知識と日本の伝統を融合」を目指した考え方に感銘を受けた。私にとって、当時の水戸学者の一部が持っていたこの感覚には学びが多かった。

水戸学の教えを胸に、テクノロジーや文化などで変化が激しく、また国際化が進み、異なる文化や価値観との共存が求められる現代において、柔軟に新しい知識を吸収し、多様性を尊重しつつも、自分の思想や価値観を大事にしていきたいと思う。

### 参考文献

「水戸学と明治維新」(吉田俊純、2003年)

「水戸学事始」(松崎哲之、2023年)

ウェブサイト「観光いばらき」

<https://www.ibarakiguide.jp/site/kodokan.html>

ウェブサイト「WEB歴史街道」

<https://shuchi.php.co.jp/rekishikaido/detail/8452>

ウェブサイト「水戸市」

<https://www.city.mito.lg.jp/>